

## 竹内さんのウクライナ便り

ウクライナとポーランドで行われていたサッカー欧州選手権大会は無事終わったようで、しかも期間中に訪れた外国人観光客の数は、ポーランドよりウクライナの方がかなり多かったとか（副首相によれば180万人）。

一方、彼らがウクライナで使ったお金が10億ドルほどなのに対し、同大会の準備にウクライナが費やした金額は50億ドル、という報道もあります。10月に予定されている最高会議選挙に向け、各政党の広告看板が路傍で目立つようになりましたが、政権与党である「地域党」の宣伝文句の一つは、「大会は終わっても、成果は残る！」というもので、美々しく改装されたサッカースタジアムや、大会に向け導入された長距離特急列車の画像があしらわれています。サッカーに興味がなく、ウクライナの平均月収額と比較して驚くほど高い料金の特急列車にまず乗ることもないだろう私などには、あまり縁のない

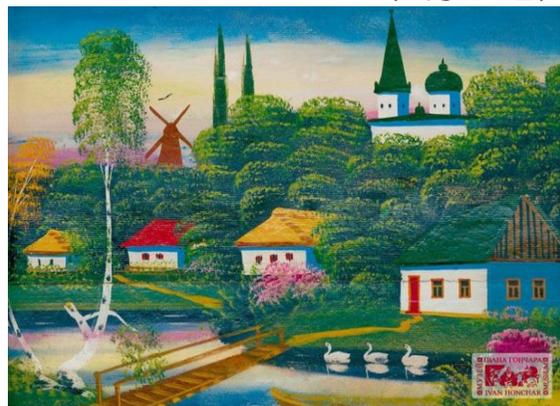
「成果」ではあります。しかし、現政権に対し批判的な私の知人の一人も、ウクライナが大過なくこの大会を終え、外国からの訪問者にもますます好評であったことを誇りに思っているようです。アメリカに留学した経験があり、英語に堪能な彼の息子（大学院生）は、「同大会見物に来る外国人に無料で自分のアパートの一室を貸す」とのお知らせをネット上で流し、オランダ・スイスなどの客人を迎えて英会話の訓練をしたとか。そういえば、大会の期間中、キエフの都心のそこかしこで、「ヴォランティア」と記された緑色の制服(?)をつけた若い人たちを見かけました。英語のできる学生などが、街に不案内な外国人のため情報提供者の役割を務めていたのでしょう。決勝戦前日の6月30日には、都心の独立広場でロック歌手エルトン・ジョンとクイーンを迎え、ウクライナ有数の富豪にしてクチマ元大統領の女婿ピンチュク氏の招待による、エイズ啓蒙無料コンサートが開かれました（エルトン・ジョンは、以前にもピンチュク氏の招聘で同趣旨のコンサートに出演したことがあります）。これも盛況だったようです。しかし某週刊誌のコラムでは、

同誌の元発行人であるアメリカ人が、3月に地域党議員により提出された「同性愛に関する肯定的な情報の提供を目的とする集会・パレード・デモ等を禁止する」法案が可決されれば、まずゲイのミュージシャンとして著名なエルトン・ジョンの招聘者であるピンチュク氏が逮捕されるべきだと皮肉っています。

このピンチュク氏がキエフの都心に開設した「ピンチュク・アート・センター」なるごく新しい現代美術の作品を集めた施設があり、入館無料です。日本の村上隆氏などの作品も展示されています。私は最近初めて行き、かなりの量の展示品をしげしげと見たものの、「どうして現代美術はこのようにつまらなくなってしまったのだろう」という程度の感想しか残りませんでした。ピンチュク氏は豊かな資産の一部を用い、自分の趣味を満足させると同時に、ウクライナでの現代芸術振興に貢献しているつもりなのかもしれませんが…。

一方、ウクライナでは、村落部で無名の画家により描かれた民俗画の伝統があり、20世紀中葉の作品を集めた小さな画集が最近出て、私は飽きずに眺めています。白鳥の湖や民族衣装の男女など一定のパターンの事物が繰り返し描かれており、これも一種のキッシュと言えそうですが、少なくとも村上氏の作品などよりは見て楽しいもののように思います。ソ連時代の20世紀半ばに、トラクターも何も登場しない、民謡などの伝統的なモチーフが綿々と描き続けられていたのも不思議な気がしますが、日本画というものの存在を考えれば同様のことでしょうか。

(7月27日)



<ウクライナの民族画の一例>